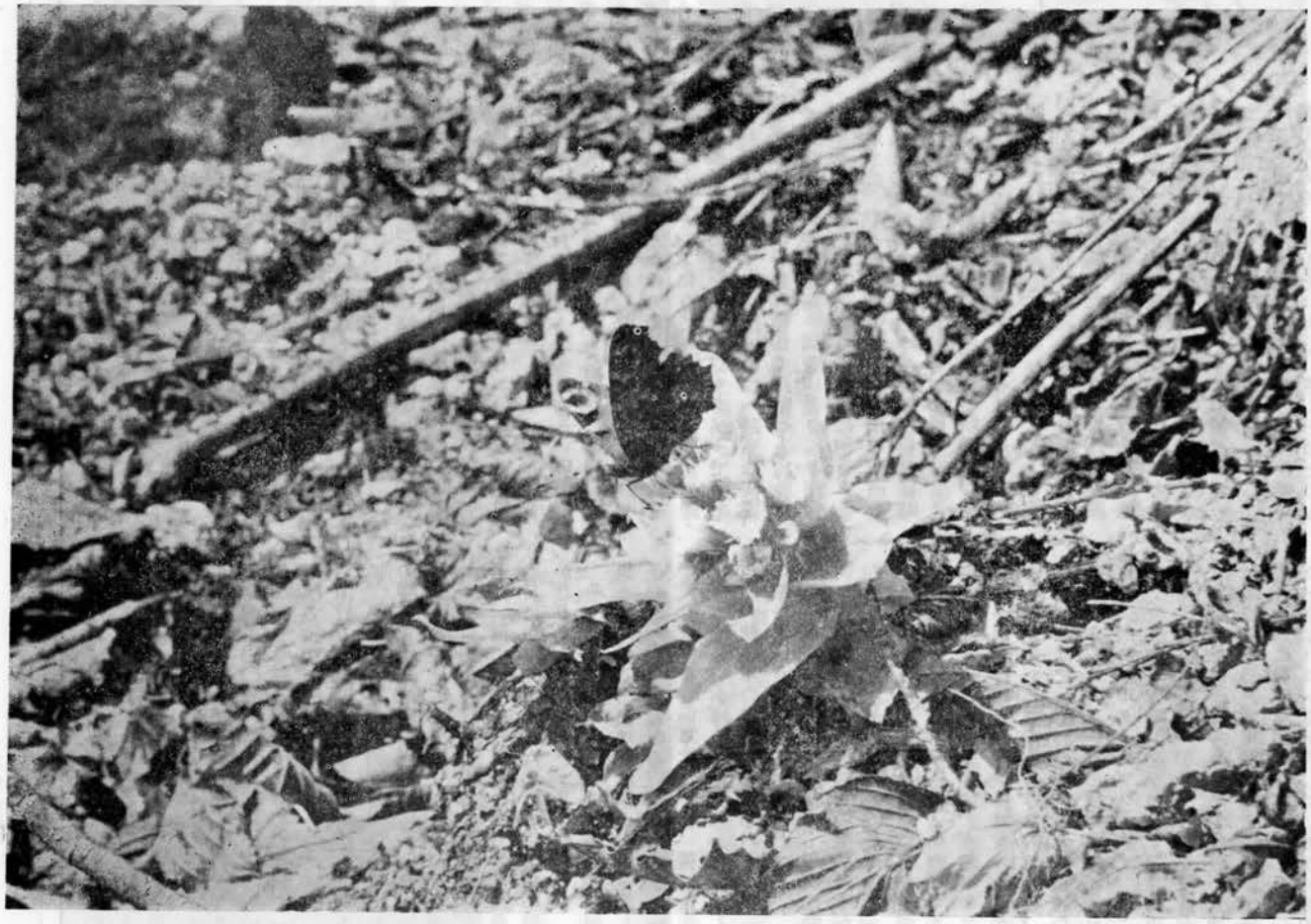
① 毎月1回 25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月23日)

山と博物館

第14巻　第3号　1969年3月25日　大町山岳博物館



地方博物館に期待するもの

博物館は文化教育の施設であり、調査研究は怠ることのできない必緊事である。

この意味では数あるローカル博物館の中で出色の例となるのが大町市立山岳博物館であろう、市町村毎にそこに相応しい博物館が住民の希望を担って設置されてゆくことは極めて望ましいことである。

博物館には公立私立の別その他がある、そこには個々に大切な、大切にされる精神がある、いってみれば設立の目的、趣旨とかに、かかわるものである、精神があっても実現しない地方の現状の中で立ちあがった好例が大町の山岳博物館であろう。

どこかで誰かがやらなかったら県内の各地域に今日程の博物館の誕生は望めなかったであろう、ここまで自力で伸びてきた施設を根強く育てることに大きな努力を注ぎ、成長し個性を持ちつつあるこの博物館の活用を増進し充実するための援助を、指導を進める責任はどこにあるのか深く考えたい。

長野県に例をとれば広大な地域と人口二百万人を擁して歴史と文化または豊かな自然に恵まれた信濃には年間約五千万人の訪問者があるという、しかしながらいまだに目的を明らかにした県立の博物館は建設されていない精神がないのか、精神はある、県人の愛唱歌「信濃のくに」である、これはそらうたにしては惜しい…県花も県木も県獣もある、これらは博物館と無縁なのかと問いたい、まことに不思議である。県内に限らず地方には地方のもつ味わいがある、この味わいを発見し開発して醍醐味にまで高める精神を貫いていく博物館こそ衆庶の願いを楽しませ、慰め励ます心を察したものといえよう、研究も調査も、収集も展示も主眼をここに据えたい。

入館者の素直な驚き、喜び素晴しいとの声が湧きおこる時、興味と関心を更に高める歯車は一駒づつ進むことになる、管見多謝乞御批判

（小諸市立火山博物館長　土屋実）

台湾の高山とその植物にふれて

（その二）

……雪山の記……

中村武久

玉山から下り、途中阿里山で二日ほど滞在し附近の植物採集をして台中へ戻ったのが七月十五日の夜である。

十日間に及ぶ涼しい山での生活から、再び暑い平地での生活、採集品の整理だけでも容易でないところへ、三日間の準備で次の雪山（次高山）行きをやらねばならない。幸い呉隊員の紹介で、中国医薬学院の学生で生薬を研究している李君の協力を得、近所の高校生三名をアルバイトに雇い、標本整理の作業は彼等にやってもらう、しかし、そうかといって最初からまかせきりにもできず、午前中は我々も一諸にその作業、そして午後には雪山行きの準備を行なう。めまぐるしい作業で毎日床につくのは午前二時、三時という仕末だった。十八日の夕刻、ようやく準備も了え、台湾山協から派遣されたリェーゾンの詹清波さんも到着、また遠く東埔村から呼んだポーター二名も着いて最終的な行動打合せを行なう。

雪山（三九三一㍍）は近年かなり登山者が増えたとはいえ、道路、山小屋の整備、設備はない。いわゆる一般の登山ならいざ知らず植物の採集や調査をどうやるかはかなり難問題であった。詹さんの意見もあり、我々が予め予定していたポーター二名に加え、環山の部落でなお二名のポーターを雇うことにし、翌十九日九時、用意したマイクロバスで台中の基地を出発したのである。

バスのフロントに立てた日の丸は路傍の野良で働く人達の目を引き、立ちあがって手を振ってくれる人も多い、バスは一路東西横貫公路を走り梨山を経て環山の部落へと向ったやがて午後一時頃部落へ到着、詹さんの紹介で部落の首長格の林徳全さんの家に泊ることになった。我々が珍らしいのか近所の子供も大人も我々の囲りに群がってくる。昼食後時間があったので偵察を兼ね、村の奥のキヤワン渓方面へ採集を試みる、渓側の断崖にことばに聞いたフウ（楓）の木をみたのが印象的だった。

〔環山にて〕

こんな呼び方をしてよいかどうか、この環山という部落は旧志佳陽社と呼ばれた高砂族の部落で、次高山（雪山）への登山基地として有名である、また部族はタイヤル族で美人の村としても有名である、しかし後者については期待ほどではなかったようだ。

さて首長格の林徳金さんは、なかなか若い感じの人で、孫をもつおじいさんとはとても思えない。かって日本時代、高砂部隊の一員として従軍したことがある由、何か我々に身近かな親しみを感じさせる、日本からの登山隊はたいてい林さんの家に世話になるらしく息子の徳生さんが写真を出して来て、これは三年前の○○隊、これは昨年の××というように詳しく説明してくれる、こうして一家をあげて我々を歓迎してくれたのだ。

山村での歓迎は、日本でもそうであるように、まず酒の宴から始まる。予め予測して酒の弱い私はビールを用意しておいたからよかったものの、ここでのフルマイ酒は粟酒といって、口あたりはそれ程でないがかなり強い酒だ、酒にはかなり自信のある桝田隊員もこの日ばかりはこたえたらしい、翌日の登りでかなりあえいでいた。

そうこうしている所へ近所の人達も何人か集まってくる、酒の宴はいよいよ高潮し、にぎやかな歌の宴となる、飛び出す歌は「骨まで愛して」や古い軍歌だ。我々何か台湾の歌を一つぐらいおぼえたいと思って所望したところ、林さんの義姉というオバサンが「次高の歌」というのを教えてくれた。

〝イボの葉かげに娘が一人…単調な歌だが何か古い時代の高砂の村人の生活がうかがえるようで、哀愁がこもっていた。

イボの葉とは何んだろうというわけで、いろいろ聞いてみると、ハンノキの類であるらしい、なるほどそう思って、夕刻キヤワン渓方面へ出かけたとさ、タイワンハンノキらしいものをあちこちでみうけたのである。

高砂族はそれぞれの部族ごとに独特な土語を使うらしい、というのは、我々が連れて行った二人のポーターはブヌン族で、ここのタイヤル族とは言語が違うらしく、共通語はどうも日本語であるようだ、しかし最近台湾の標準語は北京語である、だから若い人達はその部族の土語と北京語を話す、やがて時代の流れと共に標準語が徹底すれば、あるいはこの土語もいつか姿を消してしまうかも知れない、いまのうちに植物方言を集めておかねばなどとかなわぬことを案じてみたりした。

〔志佳陽大山を越えて〕

部落での歓迎の一夜を明け新たに部落で雇った二名のポーターを加え、総勢八名のキャラバン、玉山のときと違って何か本格的な山登りの気分になる。部落を出発し、昨日偵察したキヤワン渓へ出、ここから尾根を越えて隣りの谷、スケラン渓に下る、途中の森林の中は、このあたり標高一六〇〇㍍前後だがまだかなり熱帯的で丈七〇センチぐらいあるノキシノブの類や、タイワンウラボシなど、シダがうっそうと繁っていた。まだこの辺ではヘビの危険があったらしいが、そんなことなどすっかり忘れてやぶの中にもぐり、時間の経つのも忘れてしまうほどだった。

渓谷へ出ると、河原もかなり広くあちこちにススキが群生し、また昨夜の歌の中に出てきたイボの木ならぬハンノキが点在する。また渓側の斜面をみるとブドウの類だろうかつる性の植物があちこちにぶらさがっている。しかし一寸谷合いの所には大きな葉を広げているカミヤッデがみられ、矢張り台湾だなあと思わせる。

この渓谷の溯行中四回渡渉、初めのうちはていねいにズボンをまくり上げていたが面倒になり、周囲にかまうことなくパンツ一つで渡る、水は骨に浸みいるように冷たい。

やがて志佳陽大山への登りにつく、かすかに路らしいものがあるが、とにかくものすごいブッシュで、かぎ裂きをつくり、ススキの葉で手や顔を傷だらけにしながら登る。こんな状況だから植物もろくにみていられなかったやがて途は益々急坂となり、桝田隊員は昨夜の粟酒のせいかすっかりバテ気味である、この登りはマツが主でその下草はススキが茂りその中にツツジ科の灌木があるくらいで植物は余り面白くない、そんなことをいいわけにして、登ることだけに終始してしまった。

やがてこの日の目的地サイラン酒という所

ブヌン族のポーターどても良く働いてくれた。

タ、ミヤマコケリンドウなどの小さい花が目にふれる、ヤダケの中に白いタカサゴユリも顔をのぞかせている、頂上近くで珍らしいスゲシダをみつけた時は昨日のきつかった登りも忘れてしまう程であった。

頂上に出ると突然のごとく、顔前に雪山の大きな山容が現われ、迫ってくるかのようにそびえている。はでやかな玉山と違って地味な奥深さを感じさせる雪山の姿にしばし足を留められ、やがて我にもどり先きへと急ぐ。

ヤダケの原のふちを一気に下り、また登りそしてトドマツの森林帯へ入る森林の中はちょうど日本では南アルプスの森林帯に似て、林下には、アカネ科のムグラ類、セリ科の植物、小さなフタバラン、シダではシラネワラビに似たモリソンワラビ、ヤマヒメワラビに似たヒロハナヨシダなど日本の山を歩いている錯覚をおこすくらいである。やがて尾根を東側に越え、森林帯の谷合いに、かって山小屋があったという次高山荘跡に到着した。

〔雪山登頂〕

出発前から心配していた通り、好天続きで山荘跡でのキャンプは極めて水不足であり、谷へおりて岩のくぼみにたまっている水を集めたが、とても二日間の生活はまかなえない残念ながら山頂は一日だけという訳で、翌朝六時に出発し山頂へ向った。森林帯を少し下り、雨がふればかなり水が流れるだろうと思われる岩底になった谷を登る、少し登ると右側に大きな岩壁があり、ここは数年前日本の小味隊が登攀したという岩場で、その当時の名残りを留めザイルがぶらさがっていた。この斜面に紫に点々と染まるものがあるので、何かと近づいてみると、今だまだ種名はわからないが、日本ではヒナチドリに似たランの一種である、背丈は数センチ、丈の割に大きな花をつけ、なかなか美しいかわいらしいランである。この他スミレが二種、カラマツソウ、タネツケバナの類、そして黄色な花をつけたネバリコゴメグサも小さな群をつくっている。

この上部から谷を離れ左側の森林の中へ入る、この森林はニイタカトドマツだけでなくビャクシンの大木が混生し、下にはコケが一面にはえ、ところどころユキザサが白い花の群を広げている、ムグラの類、セリ科の小さな植物、そして所によってはニイタカクリンソウがかなり沢山みられる。

ここをぬけるとこんどは雪山正面の谷へ出る、岩のわれ目にキンポウゲの類、タカサゴカラマツ、細い白い葉のヨモギ類、そしてシダではタカネシダ、ナヨシダ、ヤツガタケシノブ、ちょっと違うがリシリシノブに極めて近いものなど日本の高山と非常によく似ている。この谷は登るに従って漸次広くなり、やがて頂上正面のガレた斜面となる、足もとの不安定な礫に苦労しながら直登し、やがて頂上直下でこれをトラバースして尾根に出る。この周辺は玉山と大差なく、ハイマツ状に地面にはうニイタカビャクシンやニイタカシャクナゲ、そしてヘビノボラズの灌木、岩場にはカワカミウスユキソウやミヤマコケリンドウ、ゆるやかな礫地にはニイタカウスユキソウが群生し、そして珍らしいムラサキ科の植物もみられた。

この尾根に出ると頂上へはすぐである。頂上は割合い広く、地面も砂礫で植物もよく繁殖している、ビャクシンの縁の草地にはフクトメキンバイがまばゆいような黄色の花をいっぱいつけて今を盛りと咲乱れてきいる、なかには大きな花のものがあり、これは種類も違うようだ。

頂上は風が強く気温もかなり低い、唇を紫にしながら頂上周辺の植物を探しまわる、できれば北に延びる尾根づたい北稜閣の方まで足をのばしたかった、しかし遠く山波の続くかなた、天候の変化を告げるかのように雲行きがあやしくなってきた。登頂したときは一望できた大覇尖山、桃山、マボラス山、中央尖山の峯々も、ときおり雲の中に姿を消してしまう、残念だが台風のこわさを知っている我々は、またの機会を心に秘め、重い足をさき程の斜面に向って下ったのである。しかしこれが好判断で、実は一日遅れれば、山の中に十日間ぐらい足止めされる破目になったことだろうと思うと、矢張り退却もまた勇なりか。思えば玉山より植物はかなり豊富であり何んとかもう一度雪山への機会をと今も心がうずいて仕方がない。

タカサゴユリ

【東京農業大学講師】

キンケイキジ飼育について

坂田　尚

キンケイキジとは仮名でありニホンキジのオスとキンケイメスとの交配種である。

両者ともにキジ科に属すのでその交配は可能であり昨年フ化させた交配種の飼育結果を記してみたい。

先づ六月上旬頃のキンケイ産卵期にキンケイ三才のメス一羽とキジ三才のオス一羽を一番にして飼育を試みた。その観察中に一回の交尾を三日後に確認した、交尾後四日目に初卵を産みそのあと一日おきに計十二個を産卵したのち七月一日から抱卵に入った。

七月二十五日午前中に三個の無精卵を残して九羽がフ化した。フ化当時のヒナは黄茶褐色の同色でキンケイのヒナとまったく変りなかったが六十日を過ぎる頃から四羽のヒナの顔面の眉斑に褐色と白色の曲線が目立つようになり、キンケイのヒナとの違いが現われてきた。九羽とも体形と成羽色はキンケイのメスに似て全身淡黄茶褐色であった。

フ化後約百日目の十一月に入る頃から四羽のうち二羽の目先周囲に肉色の皮膚の裸出部ができ黒色の細かい小羽が点在し、その裸出部は日増しに赤味が増しキジオスの頬とまったく似たものになった。この頃より初めて性別が判断できる様になり二羽は交配種のオスであることが確認され、その頃からオス・メスの羽色の差が著しく変化してきた。

ヒナ九羽のうちキンケイがオス三羽、メス二羽で交配種はオス二羽メス二羽と性別が明らかになった。キンケイが五羽発生したのはキジとの交尾以前にキンケイのオスとすでに交尾していたものと思われる。

交配種のオス二羽についても顔部から頸部にかけて多少の相異が見られ一定した配色が出ないのは交配種の特色であろうか、交配種のメスはキジメスとその羽色と眉斑はほとんど変りなくキンケイメスとくらべて体形にも円味がなくすべてキジに酷似している。

次にキンケイ、交配種、キジ三穂のオスを比較し交配種の特色を記してみる。

（頭上及び前額）交配種にはキンケイに似た冠羽はあるがその色彩は濁黄色でやゝ短かいキジは暗緑色の金属光沢でありキンケイは黄金色で細長く後頭までたれた羽は見事である。

（後頭）交配種にはキジの特色である黒と暗緑色の角形の飾羽はなく頭上の冠羽に覆われている。キンケイは燈色の扇形の羽に紺色の二本の線が羽縁にある。

（目先周囲）キジに似て皮膚の裸出部は赤いがその部分はやゝ少ない。キンケイは皮膚の裸出部がなく黄金色の小羽である。

（嘴）キジに似て青味ある白色、キンケイは黄色でありメスは三種共に淡い黒色である

（腮及び喉）キジに似て黒紫色の金属光沢のある短かい羽であり、キンケイは無紋で茶色の細かい羽である。

（頸）僅かであるがキンケイ特色の扇形の羽が残されているが他はキジに似た暗緑色の金属光沢であり、キンケイは暗緑色の金属光沢に黒色の羽縁がある。

（肩）キジに似た黒色で各羽は赤銅色で羽縁沿いにクリーム色U字形の曲線が見られる羽が僅かに存在する。キンケイは暗黒色に黄色の太い羽縁がある。

（背）濁った茶褐色で無紋の羽で覆われている。キジは黒色で暗緑色の金属光沢で各羽には羽縁に沿って赤銅色を帯びたクリーム色のU字形の細い曲線が三層ある。キンケイは暗黒色の金属光沢の羽と黄金色の羽とで腰部まで覆っている。

（胸）羽の中心部が黒色で羽縁は薄黄茶色であり交配種特色のものである。キジは黒色と暗緑色の金属光沢でキンケイは黄色の下地に赤い羽である。

（腹）灰褐色で羽紋はボケて流れているがキジは中央が黒褐色で腹の両側及び（脇）は黒色で藍緑色の金属光沢でありキンケイは灰褐色で羽先が茶色である。

（腰）背部と同色微かであるがキンケイメスと似た羽紋を残す。キジは青灰色で中央の部分は淡いブロンス緑色で各羽は細長くたれている。キンケイは背部と同じく黄金色で羽先に赤色がある。

（脇）黄灰色無紋でありキジは暗褐色キンケイは灰褐色の下羽が無紋の赤色の羽で覆われている。

（腿）黄灰色でキンケイメスに似る。キジは黒色でキンケイは灰褐色である。

（跗蹠）キジに似た灰黒色でキンケイはオスのみ黄色である。蹴爪は共に鋭い。

（小雨覆）キジに似て黄茶色に黒色の曲線が三層あり、キンケイは暗黒色である。

（中雨覆）小雨覆と同じでやゝ大形でありキンケイは灰褐色で無紋である。

（大雨覆）暗緑色で羽縁に褐色の曲線が一層ありキジは暗褐色でキンケイは灰褐色の無紋である。

（初列風切）淡い黒色に黄色の横縞がありキジは褐色で白色の斑紋からなる横縞が多数ある。キンケイは暗黒色で無紋、下部にクリーム色の細い羽縁がある。

（次列風切）初列と同色同紋であるがかすかに紫色が認められる。キジも初列と同色でキンケイは暗黒色で下部の羽縁に茶褐色の斑紋がある。

（三列風切）初列と同じであるが下部にクリーム色の羽縁がある。キジは黒褐色で黄褐色の巾の広い縁があり外側には更に栗色の縁がある。キンケイも次列風切と同色である。

（上尾筒）無紋の褐色でその羽先は茶色で長くたれ下る。キジは腰部と同じでキンケイは赤色の羽が長くたれ下る。

（下尾筒）灰黒色で羽縁は褐色でボケている。キジは黒緑色でキンケイは濁った茶褐色である。

（尾翼）下羽はキンケイメスに似るが上羽のみ茶色で黒色の細い横縞があり上羽二本は特に長く尾を引く。キジは灰褐色に黒色の横縞がある。キンケイの下羽は茶色に細い黒色の斜めの線があり上羽の一本は巾広で黒色の網目の縞があり他の尾羽を覆っている。

（啼き声）平時はピキョ〳〵と短かく啼きジスプレーの時はピャー〳〵とカン高く啼くのはキンケイと同じである。

（習性）人馴れせず同類の頭を突く習性はキジに似ているが塒に高所を好むのはキンケイと同じである。又キジと同じく平時は別行動をする。繁殖期におけるキンケイオスの独特な求愛動作は交配種が一年以上の成鳥になるまで不明である。

交配種はキジとキンケイに比べてその発育は早く体形も前者よりやゝ大であり、外観的に見て羽色全体が頸部を除いて濁りのある茶褐色でしめられキンケイオスの美麗な錦の羽色の特色はほとんど残されていない。

【明科フィッシングランド・飼育主任】

ニホンキジとキンケイの交配種のオス

表紙説明

フキノトウにとまるクジャクチョウ

撮影　倉田　稔

山と博物館 第14巻第3号
一九六九年三月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL大町②〇二一
大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町
大糸タイムス印刷部
定価　年額　三〇〇円　（送料共）